《正岡子規（36）の続き》その263

子規周辺の人びと（十三）

平岸　三八

子規は在京の叔父・加藤拓川の上京をうながす手紙を見るや、その文面にある如く「即日ニモ艦便次第」という訳にはいかなかったが、2日後には出発している。拓川の文面によるように、ぐずぐずすれば、留別だ、送別だとなにかと物いりだから、支度もなにもいらぬから、すぐにも出発せよとの忠言と守ったものだ。それに嬉しくてたまらず、じっとして居られなかったのだろう。かねての志が遂げられるのだから。

生涯書きに書き、親友漱石に、「お前のように書いてばかりいては、イデエを養うことはできないだろう。もっと読書をせよ」と青年時代に忠告されている。それほど執筆にいそしんだ子規にとっては、事々物々、書く材料ならぬはなかった。

初の長旅の上京に際しても、「東海紀行」なる長文の記をのこしている。松山三津浜から、神戸までの船旅の委細であるが、同船の人との対話、船中の光景、四辺の風光など、漢詩、和歌を含むもので、出発前2日の松山でのあわただしい様子もうかがえる。

それでも6月9日明教館で暗に別れの演説をした。中学校の演説会はどこまでも自主自由の精神で行くべきだとの主旨である。終って壇を下りて「落涙数行、暗ニ衣襟ヲ湿セリ矣」と書き、聴衆は果して如何に感じたかとも書く。はっきり上京の意志を表明したのではなかった。

同日の午後は、親族と離宴を開いた。宴といってもまだ少年のこと、殊に下戸であった子規にとっては、単なる会食の席であったのであろう。

のち2人の友人が訪ねてきたので、共に道後温泉に浴し、人力車に乗って深夜12時帰宅した。

翌10日、また離盃を傾け、正午、人力車に乗って出発せんとす。親族朋友みな門外に出て、見送り、各人子規に言葉をかけ、子規は笑顔で応酬したが、心中は果して如何と書く。

このとき狂詩ができた。

離筵各把手　親戚坐吾廻　献酬一杯酒
胸裡暗愁催　我腸如切断　陰雲閉不開
雲凝疑忽成雨　灑自眼裡來（中略）
送別聞一語　一語何促哀　痛疼貫我腔
恰是乗車時　処変品各変　人違言各違
朋友曰黽勉　親戚曰息災　欲答辞不出
為礼忽相離　車走人已遠　顧望呼悲哉

こんな長い漢詩が、親戚、友人との別を惜しんでいる最中に、咄嗟にできたわけではあるまい。のちに原稿をなすにあたり、当時の情景を追想してでき上がったものだろう。

三津港には前日共に道後温泉に赴いた二友人も来た。汽船豊中丸の中等室に投じたというから、中学生にしては贅沢な旅であったことが知れる。

「其快言フベカラズト雖、其悲亦発セザルヲ得ズ。快也東都ニ赴テ宿志ヲ達セント欲スルニ因ル。悲也一人ノ我ニ伴フ者ナキニ因ルナリ」とあるから、快は快としても、ひとり旅の悲哀を感じない訳ではなかった。

4時出帆、8時40分宇治着、翌11日午前3時多度津着、5時解纜。やがて源平合戦の屋島の古戦場を右に、播磨洋を左に、また淡路島を右に見るなどして、明石を経て、夕方神戸に着した。

船中にて、漢詩と和歌を得た。

杜宇一声夢裡聞　郷愁半夜思紛紛
故園何処挙頭望　水上有山山有雲

ふる郷をかなたの空とながむれば窓にさし入るおぼろ月かな

宿に投じたのは正に5時。それより人力車に乗り、神戸市内、梶原景季の古戦場の生田森、布引滝、楠公神社、福原遊廓等を見物して宿にかえれば7時である。神戸市街の繁華、西洋人の自転車（殊に婦人、児童の乗る）のを珍らしく眺めた。

未だ東海道線の汽車が通じていなかったので、神戸から横浜まで船を代えて、更に新橋までは鉄道によったのであろう。（東海道線新橋・神戸間全通は、明治22年7月1日。片通約20時間）